

2012 年度総会資料

2013 年 3 月 16 日（土）16 時～ 於：北海道大学



北海道の労働と福祉を考える会

目次

1. 報告事項

1-1. はじめに	高田晃太郎	・・・3
1-2. 2012 年度活動概要	高田晃太郎	・・・4
1-3. 夜回り	楠高志	・・・5
1-4. 炊き出し相談会	高田晃太郎	・・・9
1-5. お雑煮炊き出し会	細谷洋子	・・・18
1-6. 調査活動	山内太郎	・・・22
1-7. 同伴・フォローアップ	山内太郎	・・・26
1-8. 学習会・講演会	大瀧雅史・楠高志	・・・31
1-9. 広報	下郷沙季	・・・36
1-10. 助成金	楠高志	・・・37
1-11. 来年度に向けて	下郷沙季	・・・38

2. 審議事項・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

2-1. 2012 年度会計報告	楠高志
2-2. 2013 年度役員体制	嶋田佳広
2-3. 2013 年度活動計画	嶋田佳広
2-4. 2013 年度予算案	嶋田佳広

3. 私と労福会・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

1. 報告事項

1-1. はじめに

今年度は、事務局長不在の状態スタートしたことに象徴されるように、人手不足が特に深刻な年でした。それでも炊き出しや概数調査などの仕事は黙っていても振りかかってくるから、「自立とは何か」「支援はどうあるべきか」という本質的な議論はとりあえず後回しにして、目の前に山積みされた仕事を翻弄され続けながらも何とかこなしていく、といったありさまでした。

しかし、だからといって当会が発足以来から掲げてきた「ホームレスの人たちと関わり続けること」が疎かになったわけではありません。会員の中には並々ならぬエネルギーをもって活動に参加していた方もいます。会としては、新たな取り組みとして夜回りの実施を今までの月 2 回から月 3～4 回に増やしました。これは、私たちがホームレスの人たちと関わっていこうとしたとき、まずは当事者の人たちと接する機会を増やし、実践を通してホームレス問題に取り組んでいこうと考えたからでした。

炊き出しでは初めて来場者全員に対して生活実態調査を行いました。ここで得られた結果は、今後の活動の可能性を探っていくための大きな材料となりました。

同伴・フォローアップ活動は今年度も欠かさず行ってきましたが、一定の成果を上げるとともに、多くの課題も残りました。勤医協病院の「無料診療制度」を利用し、病院同伴に行くことが増えたのは、今年度の大きな特徴でした。

ここでこの 1 年の活動を振り返りながら、来年度に向けて総決算を行いたいと思います。

1-2. 2012 年度活動概要

4 月 23 日	札幌市との意見交換会（炊き出しについて）
5 月 19 日	炊き出し・総合相談会①（札幌市と共催）
6 月 23 日	炊き出し・総合相談会②（札幌市と共催）
8 月 25 日	夏季野宿者概数調査
9 月 8 日	炊き出し・総合相談会③（札幌市と共催）
10 月 13 日	炊き出し・総合相談会④（札幌市と共催）
11 月 30 日	札幌国際大学にて労福会の紹介
12 月 5 日	酪農学園大学にて労福会の紹介
12 月 8 日	炊き出し・法律相談会⑤（札幌司法書士会と共催）
12 月 15 日	講演会「路上生活者支援 13 年の歩みと東日本大震災」 （仙台夜まわりグループ 今井誠二さん）
12 月 22 日	学習会（女性ホームレスについて）
1 月 5 日	お雑煮炊き出し会⑥
1 月 18 日	札幌市との打ち合わせ（概数調査について）
1 月 19 日	会報「ともに生きる NO.26」発行
1 月 26 日	冬季野宿者概数調査
〃	講演会「女性と貧困—路上の視点から」 （立命館大学准教授 丸山里美さん）
2 月 16 日	炊き出し・法律相談会⑦（札幌司法書士会と共催）
3 月 16 日	事例報告会・総会
通年	運営会議（月 1 回）、夜回り（月 3～4 回）

1-3. 夜回り

当会では現在、毎週土曜日（第4土曜除く）の19:00に札幌エルプラザ2階（北8条西3丁目）に集合して、2時間余の夜回り活動を行っています。夜回りでは、定期的に野宿者が多く居られる場所に出向き、コミュニケーションを取ります。当会では缶コーヒー・カップ麺や携帯カイロ、チラシ・パンフレットを持って巡回しています。当会自前のチラシには、当会の相談用連絡携帯電話番号、次回の炊き出しのお知らせ、他団体の炊き出し情報等を掲載しています。

1-3-1. 夜回りの目的・意義

夜回りの意義は、1に安否確認です。今冬は例年になく寒さが厳しい冬になりましたが、年明けから、会員の巡回中あるいは連絡を受けて、病院への入院をサポートした件が既に3件ありました。2つ目は、「野宿者との信頼関係の構築」です。話し合いを重ね相手の人柄・来歴などが分かることによりこちらもある程度の安心感を持ち、当事者も私たちの真意を理解する事により相談しようという気持ちを持ってもらえるようになることがあります。もちろん全ての方にそうしてもらえるわけではありません。3つ目は「新たに野宿になった人の発見」です。ホームレス状態になって間もない人は、居宅生活に戻りたいという気持ちが強く、支援団体とまだかわりを持っていない人が居られます。そのような方に支援の情報を提供することにより、迅速に社会復帰することが可能になります。なんもさサポート、ベトサダ等他団体の協力を得て、毎年数名の方を、居宅生活に繋げています。札幌市の制度を利用して施設入所をする方、当会が住宅確保の支援をする場合、自ら住むところを探す人も居ます。

1-3-2. 今年度の夜回り

概要

日時	毎週土曜日（第4土曜除く）19:00～21:00
集合場所	札幌エルプラザ2階
解散場所	同上
巡回コース	札幌駅、大通、狸小路・ススキノ、桑園（拡大時）
スタッフ人数（平均）	約12人
出会えた人数（平均）	約22人

① 開始時間を 1 時間早くした

前年度までの夜回りは毎月第 1、3 土曜日の 20:00～22:00、出発札幌駅南口のアピアドーム、集合場所をビッセ前あるいは自由学校「遊」の事務所を借りて行っていました。反省会の場所として事務所をお借りして、事後の話し合いに十分な時間を取れた反面、帰宅時間が遅くなり、また年を追うごとに夜回り係の仕事が増えて活動を負担に感じるようになるのは、本末転倒ではないか、との指摘がありました。そこで 4 月 14 日に「夜回りを考える会」と題して会議を開き、夜回りの目的を確認した上で、方法や課題について話し合いました。

結論としては、夜回りの回数を増やすことに決まりました。それは、「ホームレス問題を考えていく上で、当事者の人たちと接する機会を増やし、実践を通してホームレス問題に取り組んでいきたい」と考えたためです。出発 19:00 からとし、3 ヶ月間毎週夜回りをして、その結果を踏まえて決めることになりました。

(考える会で出た他の主な意見)

- ・ 初参加者が定着しない。初めての人へのフォローが必要。
- ・ 気軽な気持ちで夜回りをしたい。初参加者への説明は負担になる。
- ・ 負担を言っていたら何も出来ない。回数をふやしても良い。
- ・ コースを検討してもよい。
- ・ 声をかける、話す技術の向上のために、専門的な勉強をしたら良い。
- ・ 専門家でなくても、声をかける意義はある。

その後、会議の日も月 1 回必要になり、毎月第 4 土曜日は運営会議に充てることとし、今年度はエルプラザ 2 階に事務ブースを設置したので、アクセスの便・準備のし易さの点から出発集合場所をエルプラザ 2 階としました。また、夜回りで配る物資を、コーヒーのみから、カップ麺を加えました。

② 2013 年に入ってから出会えるホームレスの数が減った

夜回りで出会えた人数は、第 1、第 3 土曜日の夜回りのみ記録しています。

表 1 にあるように、2013 年になってから、夜回りで出会えるホームレスの数が減少しました。数字で見ると、2012 年 4 月～12 月の間は平均して 24 人のホームレスに出会えていましたが、2013 年に入ると、出会える人数は平均 15 人にまで減少しました。その理由についてはまだよく分かっていませんが、冬期間は普段夜回りで回らない場所にホームレスが移動している可能性があります。

ただ、今年度の野宿者概数調査(1-6)の結果にある通り、夏季は 84 人の野宿者を数えたのに対し、冬季は 36 人まで減少していることを考えると、夜回りで出会えるホームレスの減少は、概数調査の結果と連動しているともいえます。

③試験的に夜回りを 22:00 から行った

2月23日（土）には試験的に 22:00 開始で夜回りを行いました。これは、19:00 開始だと札幌中心部はまだ人通りが多くホームレスを可視化しにくいということと、周りに人が多いと声をかけづらいという指摘が会員の中から出たためです。結果的には、札幌駅・大通で 10 人以上のホームレスが確認されましたが、ススキノ・狸小路では 1 人しか確認されませんでした。

スタッフからは、19:00 開始に比べて人通りが少なくホームレスを可視化しやすかったという声があった一方で、この時間設定に対しては、札幌周辺部から通う人、北大以外の大学生には、家に帰るのが深夜になってしまい困るといった声もありました。

表 1：夜回りで出会えたホームレスの数

日付	札幌駅	地下通路	大通地上*	狸小路	合計	参加者	初参加
24/4/7	11	9	0	10	30	17	1
4/21	7	6	2	7	22	23	4
5/5	6	6	0	12	24	17	5
6/2	10	4	0	8	22	10	1
7/7	8	3	5	8	24	10	2
8/4	6	3	0	3	12	11	3
8/18	9	0	6	5	20	9	0
9/1	8	0	9	12	29	8	2
9/15	4	0	8	7	19	5	0
10/6	11	0	7	15	33	13	0
10/20	9	0	9	10	28	12	3
11/3	6	8	0	9	23	8	1
11/17	10	9	0	9	28	11	4
12/1	6	11	—	3	20	8	0
12/15	8	7	—	5	20	6	0
25/1/5	11	2	—	2	15	8	0
1/19	7	8	—	0	15	7	0
2/16	7	3	—	1	11	10	2
3/2	6	6	—	4	18	8	0
合計	152	82	49	130	413	201	28
平均	8.0	6.3	6.1	7.2	21.7	10.6	2.5

*冬季期間、大通地上は積雪のためコース外

1-3-3. これからの夜回り

夜回りは、支援活動の入口です。野宿者に会った経験が無い市民に、ホームレスが置かれている実態を知る機会を提供するという側面が、当会の夜回りにもあります。この「学びの場」に、どうやって初参加者の興味をつなぎとめるか、モチベーションをもって次回も来てもらうには、工夫も必要だと思います。一方、実際の支援活動に対応できるノウハウを習得することも目指したい目標です。

当事者の気持ち、野宿を取り巻く社会状況、私たちの考えやできること、いろいろなことを考慮しながら、私たちも話し合いを行って夜回りのやり方を変えて来ています。それと共に、年度やメンバーが換わっても、変わらない大切なことを考えることも重要だと思います。

1-4. 炊き出し相談会

当会では毎年、各種相談会を兼ねた炊き出しを行っています。今年度は、計 6 回の炊き出し相談会（以下、炊き出し）を行いました。

以下、(1)炊き出しの概要、(2)炊き出しの意義・目的、(3)炊き出しの内容、(4)今後の課題、の順で今年度の炊き出しを振り返っていきます。

1-4-1. 炊き出しの概要

炊き出しでは食事提供のほか、生活物資や衣類の提供、健康・法律・就労などの各種相談会、健康診断、散髪といったものが行われます。当日は最初に食事提供を行ったあと、スタッフが各テーブルについてコミュニケーションをとったり、希望者は散髪や各種相談会に参加して頂く、といったような形で進行されます。

今年度の炊き出し実施概要は下記の表 1 のとおりです。

表 1：2012 年度炊き出し実施概要

日付	内容	会場・時間帯	来場者数	特記事項
5/19	食事・生活物資の提供、散髪、生活実態調査、健康診断、各種相談会	中央区民センター	60	札幌市と共催 労福会への相談 2 件 市相談ブースの利用 9 件
6/23	食事・生活物資の提供、散髪、聞き取り調査、健康診断結果返却	〃	59	札幌市と共催
9/8	食事・生活物資の提供、散髪、健康診断、各種相談会	〃	50	札幌市と共催 市相談ブースの利用 6 件 北星大実習生の参加
10/13	食事・生活物資の提供、散髪、生活実態調査、健康診断結果返却	〃	記録なし	札幌市と共催
12/8	食事・生活物資・衣類の提供、散髪、法律クイズ、法律相談会	札幌市民ホール	54	司法書士会と共催 北星短大実習生の参加 法律相談 2 件
2/16	食事・生活物資・衣類の提供、散髪、聞き取り調査、法律クイズ、法律相談会	〃	49	司法書士会と共催 法律相談 4 件

※5/19、9/8 の炊き出しは 10:00～15:00、あとの 4 回は 18:00～20:00（準備等の時間省く）

1-4-2. 炊き出しの意義・目的

炊き出しの目的は、単に食事を提供するだけではなく、彼らの自立を促すことにあります。炊き出しでは、その第一段階として、夜回りではじっくり話す時間が持てない当事者と、ゆっくり話をすることができます。そこから、彼らの抱えている問題などについて情報を得ることが出来れば、彼らのニーズに合った支援が可能となります。

実際に、ここでの会話がきっかけで生活保護の申請同伴を約束することもあるれば、体が悪ければ入院などの措置をとることもあります。

また、ただ他愛のない話をするだけにしても、彼らが（非日常的な）日常生活で失っているかもしれない社会的生活を回復する第一歩になりうるという意義もあります。

1-4-3. 炊き出しの内容

今年度の炊き出しの内容について、表 2 にまとめました。

表 2：炊き出しの内容

日付	配布物資の内容	支出額 (実質)	共催 (負担分)	スタッフ*2 (初参加)
5/19	カップ麺、割りばし、石鹸、タオル、 歯ブラシ、かみそり、風呂券 2 枚*1	57,563 (73,313)	札幌市 (会場費)	36 以上 (9)
6/23	カップ麺、割りばし、石鹸、タオル、 歯ブラシ、靴下、シャンプー、くし(ブ ラシ)、風呂券 1 枚	102,108 (75,858)	〃	16 (2)
9/8	カップ麺、割りばし、石鹸、タオル、 歯ブラシ、風呂券 1 枚	58,933 (74,733)	〃	19 (4)
10/13	〃	79,903 (74,653)	〃	25 (6)
12/8	カップ麺、割りばし、タオル、歯ブラ シ、かみそり、カイロ、風呂券 1 枚	24,798	司法書士会 (会場費、食 事、風呂券代)	45 (23)
2/16	カップ麺、割りばし、石鹸、タオル、 歯ブラシ、かみそり、カイロ、生理用 品 (女性向け)、風呂券 1 枚	34,320	〃	31 (7)
合計		357,675		172 以上 (49)

*1 風呂券代の半分は NPO 法人ホームレス北海道ネットワーク（以下、北海道ネット）が負担 *2 札幌市職員を除く

①食事・生活物資・衣類の提供

食事については、昨年度まで共催していた NPO 法人ハンド・イン・ハンドの撤退に伴い、今年度は弁当屋（山の手屋）に豚汁・おにぎりを毎回 80 人分注文して用意しました。また、2 月の炊き出しでは NPO 法人札幌市福祉生活支援センターから寄付して頂いたじゃが芋を使ってポテトサラダを作り、豚汁・おにぎりに加えて提供しました。

配布物資については、生活に必要な物資 5～8 点を袋に詰めて、来場者に配布しました。各回の物資の内容については表 2 の通りです。カップ麺、割りばし、タオル、歯ブラシ、風呂券のほかに、石鹸やかみそり、シャンプー、くしを提供することもありました。また、冬季はカイロを提供しました。歯ブラシや一部のタオル、かみそりは寄付されたものを提供させて頂いていますが、カップ麺・風呂券・石鹸などについては毎回購入しています。2 月の炊き出しでは、女性向けに生理用品も配布しました。

衣類については、今年度は 2 回の炊き出しで配布しました。昨年度まではハンド・イン・ハンドが担当していましたが、今年度は東リサイクル(株)に注文し衣類を用意しました。このほか提供したものとして、お菓子があります。各テーブルごとにチョコレートやグミなどのお菓子を置き自由に食べてもらう形をとりました。中には歯がない人もいらっしゃるもので、お菓子はいろいろな種類のものを用意しました。

②炊き出しにかかった費用

札幌市との共催（5,6,9,10 月）では、市が会場費を負担してくれます。労福会が負担する分としては生活物資、衣類、お菓子、風呂券にかかる費用でした。その中で最も大きな部分を占めるのが風呂券ですが、毎回風呂券を購入する訳ではなく、風呂券をまとめて買った回と、前回に買った分を使った回がありますので、それを 4 回に均等に割って実質的な負担額も示しました。

司法書士会との共催（12,2 月）では、司法書士会が会場費と食事、風呂券にかかる費用を負担してくれました。12 月に比べて 2 月が 1 万円ほど高くついているのは、ポテトサラダを作るための準備費や材料費にお金がかかったためです。

札幌市との共催時に比べて、司法書士会と共催の炊き出しでは労福会の負担が 5 万円ほど軽くなっていることが分かります。

③スタッフ

スタッフは、少ないときで 15 人、多いときでは 45 人と、回によって大きく異なりました。初参加者の参加状況についても同様のことがいえます。

5 月の炊き出しでは生活実態調査を行うにあたって NPO 法人ベトサダや北海道ネットから 15 人以上の参加があり、総スタッフ数は 35 人以上に上りました。12 月の炊き出しでも北星短大から実習生 8 人、札幌国際短大ボランティアサークルから 10 人の参加があり、総スタッフ数は労福会と司法書士会のスタッフとを合わせて 45 人に上りました。

④散髪

2003 年度から炊き出し会場で散髪を実施しています。今年度も折川さん夫妻のご協力によって散髪を実施することができました。毎回 10 人程の希望者がおり、髪を切ってもらっています。散髪の待ち時間や散髪をしている間にも来場者の方と話をすることができ、コミュニケーションを深める良い機会ともなっています。

今年度は希望者に先着順で散髪を実施していましたが、先着順だと不公平だという声もありましたので、会で話しあった結果、公平を期すため来年度からは抽選によって行うことが決まりました。

⑤生活・法律相談

札幌市と共催の 5 月、9 月の炊き出しでは、区役所職員による生活・福祉相談や、ハローワーク職員による就労相談、精神保健福祉センターによる精神保健相談、札幌弁護士会・人権擁護委員会による法律相談と幅広い分野で相談が行われ、加えて健康診断（検尿、血圧測定、血液検査、X 線検査）も行われました。そして、6 月、10 月の炊き出しで健康診断の結果が返却されました。

相談会は、会場内にブースが設置され、希望者がブースに入って相談する、といった形で行われました。この相談会の利用状況については 2004 年 9 月の炊き出しから記録が残っています。それを表 3 にまとめました。

表 3：市各種相談会の年ごとの利用状況

年月	04.9	05.5	05.10	06.5	06.9	07.5	07.9
健康相談(件)	41	37	22	18	21	21	15
精神保健相談(件)	2	0	1	1	0	0	0
法律相談(件)	2	3	2	0	0	1	0
就労相談(件)	12	7	1	2	3	5	2
生活・福祉相談(件)	27	16	7	2	7	9	6
利用者実数(人)	46	43	24	20	25	25	17
支援団体炊き出し(人)	74	87	55	65	72	59	74

年月	08.5	08.9	09.5	09.10	10.5	11.5	11.10	12.5	12.9
健康相談(件)	12	12	22	15	20	13	13	5	3
精神保健相談(件)	0	1	2	0	1	0	0	0	0
法律相談(件)	2	1	1	2	0	0	1	2	1
就労相談(件)	1	3	3	2	0	1	0	1	1
生活・福祉相談(件)	1	1	5	2	2	4	0	1	1
利用者実数(人)	14	15	32	17	22	17	14	9	5
支援団体炊き出し(人)	51	61	68	62	70	62	65	60	50

相談会の利用者は年々減少傾向にあります。2004 年頃では 40 数名が利用していたのに対し、今年度は初めて一桁という結果に終わりました。特に健康相談（診断）の利用者の減少が顕著です。もちろん当時と現在では炊き出し来場者に差がありますが、それを考慮しても相談会利用者の減少には際立っているものがあります。相談会での個別具体的な内容、その後の経過については個人情報の壁もあり労福会としては把握できていません。

司法書士会の法律相談会では、12 月の炊き出しで 2 件、2 月の炊き出しでは 4 件の相談がありました。具体的な相談内容は、生活保護制度のこと、求職者支援制度、親子関係、退職金立て替え制度、年金制度についてでしたが、対応としては制度の説明だけで終わったものや、あとから調べて結果を伝えたもの、生活保護申請の同伴に結びついたものなどがありました。

このほかに労福会が受け持った相談もあり、中には生活保護申請の同伴に結びついたものもありました。

⑥聞き取り調査

昨年度に引き続き、今年度も聞き取り調査を実施しました。

5 月の炊き出しでは、来場者 60 人全員に「現在、野宿生活か居宅生活（生保、年金）か」を聞いた上で野宿生活と答えた 39 人に対して聞き取り調査（生活実態調査）を行いました。調査票は伴走型支援士 2 級の資格を持つ北海道ネットの島田さんによって作られました。調査はベトサダ、北海道ネット、当会のスタッフによって行われ、集計は島田さんによって行われました。

6 月の炊き出しでは、実態調査の結果を踏まえて「食生活を中心に聞き取る」調査を、10 月の炊き出しでは札幌市から依頼を受けた生活実態調査（調査票は厚生労働省が 2012 年 1 月に行った生活実態調査に準じる）を、2 月の炊き出しでは 1 月に行ったホームレス概数調査の結果を踏まえて「寝場所や就寝時間を中心に聞き取る」調査を行いました。

以下で、5 月の生活実態調査から明らかになった来場者の特性について述べていきます。生活実態調査では、来場者 60 人全員に「現在、野宿生活か居宅生活か（生保、年金）」を聞いた上で、野宿生活と答えた 39 人に対して聞き取りを行いました。

・炊き出しを利用するおよそ 3 割が居宅生活者である

来場者 60 人のうち、野宿生活など住居を持たない人は 39 人、生活保護を受給して生活している人は 11 人、そして年金等を受給して生活している人が 10 人、およそ 35%が生活保護や年金等を受給して生活している人たちであることが明らかになりました。同様の調査は 2 月の炊き出しでも行いましたが、結果はほぼ変わりありませんでした。

・50～60代が大半を占める

年齢別にみると、30代1人、40代6人、50代14人、60代15人、70代3人という結果で、50～60代が74%と大半を占めました。

・野宿歴1年以上がほとんどである

野宿歴を「1年未満」と答えた人は2人のみで、ほぼ全員が1年以上の野宿生活を経験し、一度は冬期間を越していることが分かりました。また、「1年以上」と答えた人のうち、約20%が「10年以上」の野宿生活を経験していました。なお、最長は「33年」でした。

1-4-4. 今後の課題

最後に、今年度の炊き出しの成果と今後の課題について述べていきます。

①コミュニケーションの場としての炊き出し

先述したように、炊き出しは第一義には「夜回りではじっくり話す時間が持てない当事者と、ゆっくり話をすること」があります。今年度の炊き出しでは、聞き取り調査などを取っ掛かりにして彼らが抱えている問題についてある程度知ることができました。炊き出しで交わした会話の中から生活保護申請の同伴に繋がったことも事例もあります。また、当事者同士で話が弾んでいるテーブルや、元野宿者が当会スタッフや野宿生活をしていた頃の仲間と再会し近況を確認し合う機会にもなっているのをみると、「コミュニケーションの場」として炊き出しは機能しているといえるでしょう。

②運営の難しさ

炊き出しは毎回、労福会の会員の中から「炊き出し係」を事前に指名して、その炊き出し係を中心に準備・運営を行っています。昨年度までは炊き出し係を「運営担当」と「物資担当」に分けてそれぞれ1人以上指名していましたが、今年度は人手不足もあり1人に2役を任せるという体制をとりました。その結果、当日になって準備不足になってしまうこともしばしば見られました。

また、スタッフの確保にも課題が残りました。表2に示した通り、炊き出しに参加するスタッフの数にはその回によって大きなばらつきがありました。どの回においても運営に支障をきたすほどの人手不足という事態には至りませんでしたが、逆に人数が多すぎて会場を圧迫する、全員に説明が行き渡らないという事態が見受けられることもありました。特に12月の炊き出しでは、労福会からは5名だけだったのに対して、初参加者は23名にものぼり、手持無沙汰な人が多く出た、という課題が残りました。初参加のスタッフがたくさん来てくれるというのはありがたいことではありますが、ただ来てもらうだけではなく、こちらの受け入れ体制も考えていく必要があります。参加者が多いと最初から分かっ

ているのであれば、自分たちで食事をつくってみたり、みんなで新しい企画を考えてみるなどの工夫もあると良いでしょう。

③相談会のあり方

札幌市が設けた 2 回の各種相談会では、それぞれ 5~9 人の利用がみられました。1-4-4⑤でも触れた通り、相談会の利用者数は年々減少傾向にあります。今年度は過去最も少ない数字となりました。特に健康相談（診断）利用者の減少が顕著で、今年度の利用者は初めて一桁という結果に終わりました。ホームレスには健康に不安を抱えている人が多いというデータもあるので、このような結果に終わったというのは首をかしげざるをえません。5 月実施の生活実態調査でも野宿者 39 人のうち 17 名（44%）が「健康に不安がある」と答えているにも関わらず、実際に健康相談に行ったのは 5 名のみとなっています。

この相談会のやり方については疑問に感じているスタッフも多く、反省会では以下のような指摘がありました。

- ・野宿生活になるおそれのある人達（ネットカフェ難民など）にももっと周知して、相談に乗ってあげられるようにしたい。
- ・有益だとは思いますが、活用されない状況を改善しなければならない。ブースの種類を変えたり、どのような相談を誰が答えてくれるかを明確にしたりしてみてもどうか。
- ・相談している方が少なかったのもう少しブースに入りやすくしたほうが良いと思う。
- ・相談コーナーに参加者が行くのを待つのではなく、職員のほうから参加者のテーブルを回りながら話を聞くというやり方をしたほうが有意義。

相談会自体は有益だとは認めつつも、相談員の消極的な姿勢に対する批判が目立ちました。来年度は、相談会をより良くするためにも札幌市と積極的に意見を交換していく必要があります。くわえて、スタッフからも相談ブースを利用してみてはどうかと、積極的に呼びかけてみるといった努力をしていかなければなりません。

④誰のための炊き出しなのか

1-4-3⑥で述べた通り、炊き出しを利用する人は必ずしも野宿者というわけではなく、約 3 割が年金や生活保護を受給し、アパートで生活している人たちであることが分かりました。また、炊き出しを利用するほとんどの野宿者が野宿歴 1 年以上、炊き出しの常連者であることも分かりました。

野宿者の中には、生活保護等を受けて生活している居宅生活者が自分たちと何ら変わらない条件で炊き出しに参加できていることを「おかしい」と非難する人もいます。現在の

炊き出しでは野宿者と居宅生活者の間にあえて差異化をはかっていますが、今後、野宿者は何を求めて炊き出しに来ているのか、居宅生活者は何を求めて炊き出しに来ているのかを明らかにし、その上で、炊き出しを誰のために行うのか、そもそも何のために炊き出しを行うのかといった本質的なところを議論していく必要があるでしょう。（他の支援団体の炊き出しでは居宅生活者には利用料を払ってもらうなど、既に差異化をはかっているところもあります）。

⑤スタッフが感じた違和感や疑問、悩みの声を拾う

炊き出しを利用する当事者からは、運営の仕方など些細なことで苦情・批判を言う人がおり、そうした苦情・批判をもろに受けてしまうと傷ついてしまうスタッフもいます。些細なことで苦情・批判が出るのは当事者にとってそれだけ炊き出しの存在が大きいということの裏返しでしょうが、それによって傷ついてしまうのはどうしてなのかを考えることは、「自分たちは一体何のために活動しているのか」という活動の原点に立ち返るという意味で重要だと思います。組織がうまく回っていくためにも、炊き出しに限らず色々な活動の中でスタッフが感じた違和感や疑問、悩みの声を積極的に拾い、みんなで議論してみることは、自分たちの考えを深めるという意味でも、とても大切なことだと思います。

<おまけ> 炊き出しの様子（2013.2.16）



ポテトサラダを作っている様子（北海道大学内）



食事・生活物資の配布の様子



炊き出し会場の全体像

1-5. お雑煮炊き出し会

昨年度に引き続き、今年度もお雑煮炊き出し会を実施しました。当日は 39 人の来場者があり、好評を得ました。

1-5-1. 実施までの経緯

昨年度実施した 2 回の共同炊事会（クリスマス会、あけました会）が参加者から好評だったこと、今年もやって欲しいという声があったことから、独立行政法人福祉医療機構（WAM）の助成金申請に際して事業計画に盛り込み開催を予定していました。しかし、今年度は事務局長も決まらず運営体制が確立しない中で実施できるかどうか見通しが立たず、実施について話し合う場も持てないまま年末近くになりました。実施できなかったらその分の助成金は返還しなければなりません。

本来なら昨年度の反省点を踏まえてじっくり話し合っって開催方式や時期を決定するべきでしたが、助成金を返還するくらいならやれる形でやりましょうと、時期的にタイムリミットの 11 月後半に細谷と楠（副代表）が相談しました。エルプラザ料理実習室は、その時点で 1 月 5 日（土）しか空いておらず、とりあえず仮押さえをしてから高田（事務局長）に、午後開催がいいか夜間開催がいいかをできる範囲で相談して決めることと、できるだけ早く広報を開始してくれるように頼みました。細谷はさっぽろ自由学校「遊」のスタディツアーで 10 日間留守をする予定になっており、調理スタッフの確保と食材や必要物資等の準備は細谷が、会場設営等のスタッフ確保と広報は当会事務局（高田・楠・山内）が担当すると役割分担をして出発しました。帰札後の運営会議で、あらためて企画提案をして予算や未定だった細部を詰めました。

今年度はどうして共同炊事会ではなくお雑煮炊き出し会になったのか、開催日程など、いつどこでどのように決まったのか、12 月の運営会議に参加されなかった会員のみなさんには十分周知できなかったことをお詫びするとともに、やれる形で実施することになった経緯をご了承ください。

1-5-2. 開催趣旨

昨年度同様、この年末年始の時期に実施する意義、できるだけ共同で作業をしながら交流することを目的に、下記の4点を踏まえて実施しました。

- ・年末年始の時期は、ひととき寂しさや辛さを感じる時期であり、寒さも厳しいことから、1度くらいはお雑煮を食べる機会を提供し、交流します。
- ・路上生活が長期になっている人たちにも、使い捨て容器ではなく瀬戸物の食器で食事をしたり、食器洗いなどの作業やお正月を実感する経験をしてもらい、より良い生活に想いをめぐらす機会になることを期待します。
- ・昨年度とは異なり、今回は共同で調理はしませんが、食器洗いや片付けなど一緒に作業をすることを通して、支援する、されるという関係を超える交流の機会とします。
- ・労福会と当事者だけではなく、路上生活者、脱路上者どうしの交流とつながりの機会となるように心がけ、将来的には当事者どうしの相互扶助、関係づくりにつながるような機会をめざします。

1-5-3. 当日の様子と参加者

概要

日時	2013 年 1 月 5 日（土） 9:30～15:30
会場	札幌エルプラザ 料理実習室
来場者	39 人
スタッフ	21 人
メニュー	お雑煮、おにぎり、ゆで卵

当日は、まずスタッフ間で打ち合わせをしてから、10:00 調理開始、12:30 から 14:00 まで炊き出し、14:00 から片付け、反省会、ゴミ処理、15:30 解散というプログラムでした。

メニューは、予算と調理時間等を考慮して、お雑煮、おにぎり、ゆで卵（おにぎり、ゆで卵は持ち帰り）、80 食を想定して準備しました。他に風呂券とチョコレート、お茶を用意して配りました。

事故がないよう、貴重品預り担当者を決めスタッフの貴重品をカギがかかるロッカーに入れて管理してもらいました。また、相談に来た人がいた場合に備えて、相談担当者も事前に決めておきました。今年は同エルプラザの 2 階事務ブースに資料や事務用品が置いてあるので、こうした準備がスムーズに行えました。

準備も順調に進み、行列ができていたので、予定時刻12:30より少し前に受付を開始。風呂券は帰りに配布することにし、名札をつけてもらったのですが、これはとてもよかったと思っています。スタッフも参加者も名札をつけていてお互いの名前がわかり、名前を呼び合いながら会話ができるというのはいい雰囲気でした。全員の名前を覚えられるわけではありませんが、名前を呼ぶことはコミュニケーションの基礎ではないかと思います。

今回は、調理だけではなく炊き出しそのものも料理実習室で行いました。調理がほぼ終わった後、奥の 3 台の調理台も食事用にし、この調理台と丸テーブルで食べてもらうようにしました。椅子が足りなかった場合に備えて、別室（男女共同参画研修室）も借りていましたが、受付用の机と椅子を数脚運び込んだ程度で間に合いました。

お雑煮は準備の関係上、全員一緒に食べるのは難しいので、スタッフも手の空いた人から順次一緒に食べてもらったり、食器洗いを一緒にすることで交流したいと思いましたが、やはり班単位で作業や食事をした共同炊事会のように話ができなかったという声がありました。会話や交流を促すことについては、もう一工夫必要だと感じました。

参加者数は39人、スタッフは21人でした。想定よりは少ないですが、昨年度の共同炊事会より5割増でした。食べたお餅の数は260個。スタッフ21人の分が60個として、参加者39人が食べた分が200個。10個食べたよ、と満面の笑みで言っていた人もいました。その場でも後からも、労福会のお雑煮がおいしかった、ありがとう、という声を多数いただきました。

1-5-4. お雑煮炊き出し会を終えて

準備期間が短く十分な議論をする時間も場も持てなかったのが、残念でした。なぜやるか、どういう意味があるのか、どんな方式でやるか、違和感はないか.....、夜回りも通常の炊き出しもそうですが、活動するときには準備と終了後のこうした議論がとても大切だと思っています。当会はいつもここが不十分で、活動がぶれがちだという気もします。もっとも時間と議論の場があっても、活発な議論にはなかなかならないのですが。

共同炊事はしなくても、調理場の傍らで食事をし、おかわりをしたり食器を洗ったりするのはやはり生活感のある雰囲気になったと思います。料理実習室で炊き出しをすることが可能だということがわかったのもいい経験でした。もう少し参加者が増えても対応可能だと思います。

今年も参加者どうしのもめ事や苦情などトラブルはありませんでした。名札をつけてもらうときや、最初に手を洗ってもらうときには、嫌がる人もいるかもしれない、その場合は無理強いはいしないことにしようと考えていたのですが、みなさん協力的でした。

告知は、居宅者への年賀状と夜回りの際のチラシ配布で行いました。チラシ配布開始が遅く十分に周知できなかったように思いますが、みなずき会の炊き出しでチラシをもらったという人が数人いました。事業をするときは、定期的に炊き出しをしている他団体に告知協力をしてもらうことは効果的だと思います。また、当会の支援により路上から居宅に移った方が 2 人スタッフとして参加してくれていました。今回はどんなふう to 動いてくれたのかを把握する余裕がありませんでしたが、一緒に作業をするパートナーをつけたら、少人数でおしゃべりしながら生活の様子を聞いたりする機会を設けるなど、フォロー

アップの機会としても大切にしたいと思います。

最後に、今年度も他団体の協力を支えられて実施できたことを感謝いたします。調理スタッフをはじめ、フードバンクからお茶の提供もいただきました。昨年度に引き続いて協力してくださった方も数人おり、参加しやすさや準備の問題はあるが一緒に料理をするというのも大事ではないか、いずれにせよこの取組みはとてもいいという感想をいただきました。

開催趣旨でも触れましたが、当事者がもっとも寂しさや疎外感を感じられるこの時期に、なんらかの事業を実施することは今後も考えるべきではないかとあらためて思っています。

1-5-5. 事業経費

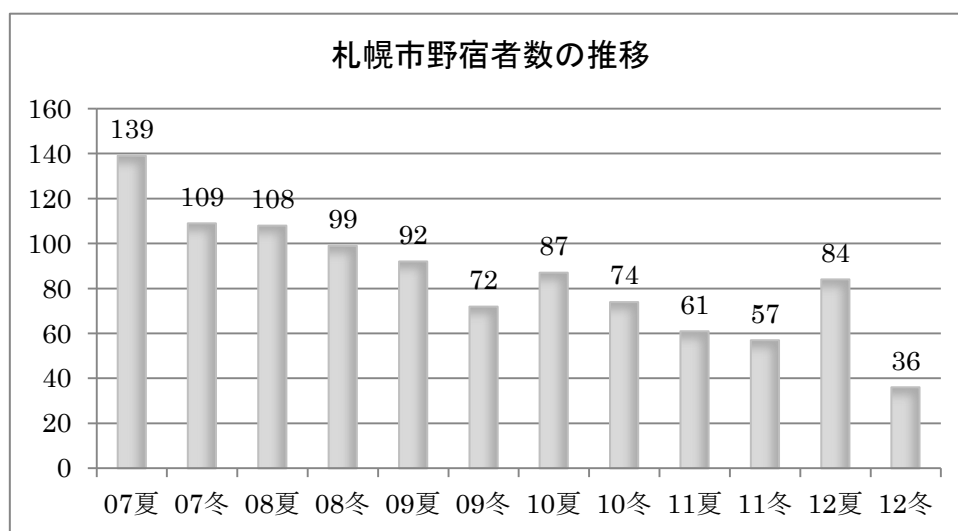
・総事業費 107,997 円

(会場費 13,100 円、食材費 35,307 円、風呂券 42,000 円、消耗品・交通費他 17,590 円)

1-6. 調査活動

1-6-1. 人数調査の試行錯誤？

当会では毎年夏と冬に札幌市内の野宿者をカウントする概数調査を実施しています。今年度は夏が8月25日（土）、冬は1月16日（土）に実施しました。全国的な傾向として野宿者の数は年々減少傾向にあるのですが、経年で比較するとグラフのとおり今年度は少し変わった結果となりました。夏季は前年度に比べて大きく人数を伸ばしており、冬季は逆に人数を大きく減らしています。



この要因の一つとして、今回は夏季と冬季ともに調査を開始する時間帯を少し変更して実施したことを挙げることができます。理由は夜回りなどで当事者の方から話を聞くなかで、例年調査を開始している時間（4:30 頃）では遅いとの指摘を受けたからです。そこで夏の調査では集合時間を1時間早めて3:00 集合、3:30 調査開始としました。冬の調査ではさらに1時間早めて2:00 集合、2:30 調査開始としました。具体的な調査手法や調査地点については例年と大きな変更はなく、札幌市内を10ブロックに分けて、各ブロックを2～4名ほどで巡視してカウントする方法をとりました。

結論から言うと、調査開始時間の変更は夏の調査では成功し、冬の調査では失敗であったと言えます。そもそもなぜこれまでの調査の時間では遅いということになったのかというと、週末は繁華街へ落し物を拾いに行く¹ 野宿者もいるなどの理由で、いつもより早く起きるという話を聞いたからでした。つまり、札幌市中心部の野宿者数を正確に捕捉するた

¹ 酔っ払いが落とすお金等を拾いに行く

めの試みとして調査時間を早くする必要があったのです。

表 1 にあるように夏の調査を前年度の数と比較すると、札幌市中心部で確認された野宿者の数は大幅に増加し、合計すると一昨年度と同水準の人数である 84 名を確認することができました。これは裏をかえすと、これまでの人数調査は多くの野宿者を数え漏らしていた可能性があるということを示しています。今回の調査によって私たちは札幌の野宿者の実態について、その人数の把握の方法すらまだまだ精緻化が足りないことを実感しました。もちろん人数の多寡が（一人ひとりの当事者にとって野宿状態であることは大変な事態であるという理解が必要という意味で）野宿者問題の大きさを示すわけではありませんが、実態の正確な把握が適切な支援や問題の解決策につながることは間違いないでしょう。

他方で、冬の調査では中心部の人数が減少し、札幌市郊外に分散しているという特徴がありました。ところが郊外で確認されていた場所の多くは J R 等の駅舎だったため、2:30 に調査を開始した結果、駅舎が開いていないという事態が起きてしまいました。その結果、郊外で確認された人数が大幅に減少してしまい、当会が調査を開始して以来最低の数である 36 名という結果になりました。もちろんこの数字が現実を示しているとは考えられませんが、冬の調査は札幌市の委託を受けており、行政が把握する正式な人数として扱われます。札幌市では野宿者の減少を受けて来年度の事業を縮小させようという方向で調整する可能性があり、調査の結果はとても重要な意味を持つものです。その意味では今回の冬の調査の開始時間を 2:30 に設定したことは大きな失敗であったと言わざるを得ません。もちろんやってみなければわからないという面もありましたが、今回は札幌市中心部において確認できた人数が増えたわけでもなかったのも、この時間の設定は次回必ず見直さなければならぬと言えるでしょう。

ただ、札幌市内で野宿者の人数を調査しているのは当会だけですので、正確な実態の把握のために試行錯誤をすることは大切なことだと考えます。人数調査は開始以来、早朝に行っていますが（早朝でなければ見分けがつかないというのが主な理由）、たとえば夜回りで顔見知りになった当事者に協力してもらって昼間に実施してみるといった思い切ったことも検討してみてもいいのかもしれない。

問題は調査の方法等を変更するのであれば、なぜそうする必要があるのかを当会のなかで十分に議論する機会を確保することであると思います。

表 1：札幌市野宿者数の確認地域の内訳

		2011 夏	2012 夏	2011 冬	2012 冬
札幌市 中心部	札幌駅周辺	20	32	21	16
	大通周辺	18	26	6	4
	狸小路/すすきの/中島 公園	9	13	11	12
	小 計	47	71	38	32
札幌市郊外		10	11	18	3
河川敷		4	2	1	1
合 計		61	84	57	36

1-6-2. 人数調査についての補足－調査の必要性について

当会が関わっている札幌市の野宿者の実態はわからないことだらけです。例えば年度ごとに夏と冬の人数を比べると、毎年夏の方が多くなっています。積雪寒冷地という札幌市の気候が影響しているという予想はできますが、実はなぜ夏の方が多いかということについてははっきりとした理由はわかっていません。冬になると減っていく人たちはどこへ行ってしまったのか。ここ数年は札幌市が市内のホテルを借り上げて行っている緊急一時宿泊事業（シェルター事業）の影響が大きいと思います。ただ、当該事業の利用者の状況は昨年度から急に鈍りはじめ、市に問い合わせたところ、今年度の冬に関しては利用件数が例年と比較してかなり少ないことが分かりました（表2）。

ここから札幌市における野宿者の数自体が減少していることは推測できますが、結局はっきりと減少しているということはできません。それは実態を把握する調査が行われていないからだと言えます。たとえば札幌市内に民間の宿泊事業をしている団体はどのくらいあって、それぞれが年間で何件脱路上の支援をしているのか集計をするといったことは、どこでもやられていないように思われます。こうしたわかっていないことを一つ一つ潰していくことは地味だけれども大切な作業であると思います。

また、事実として野宿者の人数が減っているのであれば、行政に対して野宿者支援の事業を縮小させるのではなく、むしろ野宿者全員が野宿状態から脱する機会だととらえて、より積極的な施策を求めるように働きかける必要があると思います。ただし、それも実態把握を当会がどこまでできるかという点にかかっており、その意味では調査を当会の活動の中であらためて位置づけ直すことが必要なのかもしれません。

表2. 札幌市緊急一時宿泊事業利用者数の推移

年 度	2009	2010	2011	2012
利用者数	136	91	54	39※

※2012年度は2月末日現在の数字で11月～2月で26名利用

1-6-3. 調査に関する課題について

今年度は人数調査のほかに、炊き出し相談会の際にいくつかの調査を実施しました（依頼を受けて実施したものも含む）。しかしながら、調査の実施によって当会の活動にどのような還元ができたかという点と心許ないものとなっています。

一つは調査をなぜ行うかという企画段階で十分な議論ができていない現状がありました。会議に割いた時間が少なく、また会議自体に参加するメンバーも限られてしまい、調査の意図や具体的な手法等について周知することが十分でなかったという反省が挙げられます。

また、調査の分析に関する議論をすることがほとんどできなかったということも同様に課題として挙げることができます。調査の取りまとめをした担当だけで結果を分析することは、学業や仕事を抱えたメンバーにとって非常に負担になってしまうこともあり、結果的に「やりっぱなし」になっていると言わざるを得ません。これは調査に関する課題というよりも当会の運営システムの問題なのかもしれません。もっとも今年度は事務局体制が未確立のまま年度がスタートしたという事情もありますが、例えば学習会係と連携して調査結果について議論する場を設定することが来年度は必要であると思います。

もう一つは、他団体とのかかわりについてです。一点目の課題と繋がるのですが、炊き出し相談会の場においてホームレス支援北海道ネットワーク（5月相談会）や札幌市保護指導課（10月相談会）と生活状況の調査を行いました。その結果について協議することをしていません。これも調査に関する課題という射程を越えているかもしれませんが、一緒に調査をすることで他団体と連携する機会と捉えることができたなら、より活動の可能性が広がったかもしれません。特に当会のメンバーだけでは負担になってしまうようなところを他団体と互いに補い合いながら札幌の状況を変えていけるような流れができると良いのではないかと思います。

いずれの課題も調査の技法を云々する以前の問題であり、当会が調査活動についてどのようなスタンスをとるかという問題に関わっていると言えるでしょう。

1-7. 同伴・フォローアップ

1-7-1. 脱路上の支援

当会にとっての炊き出しや夜回りなどの活動の位置づけを端的に言えば、野宿をしている当事者の方たちが、今の状況から抜け出して部屋で生活をしたいと思ってもらうための働きかけであるということになります。すると、部屋で生活したいと思った人たちに対して具体的に居宅生活に向けた支援を行うことが第二のステップであり、例えば生活保護申請の同伴や部屋探しのための不動産屋の同伴などがそれに該当するわけです。あるいは住居を提供している支援団体へ紹介するというのもその一つです。これらをまとめて脱路上支援活動と呼ぶことにします。

今年度は下記表にもあるように全部で 8 ケースの脱路上支援活動を行いました（ただしこれは報告書で確認できた数字のみ）。

生活保護同伴/居宅入居支援活動（2 月末日現在）

本人の状況と年齢		野宿歴	月	同伴/相談のきっかけ	申請（相談結果）	同伴者
A	路上（24 男）	2 ヶ月	7 月	本人からのメール	救護施設入所	井上/高田
B	路上（42 男）	3 年	8 月	夜回り	申請後行方不明※	内山/高田
C	路上（46 男）	7 日	10 月	夜回り	居宅保護	大瀧/下郷/高田/山内
D	路上（65 男）	7 年	10 月	夜回り	救護施設入所	井上
E	路上（38 男）	6 日	12 月	炊き出し	ベトサダ入居***	河合/高田/高橋/細田
F	路上（47 男）	1 日	1 月	本人からの電話	ベトサダ入居****	下郷/高田/橘
G	居宅（27 女）	—	1 月	本人からの電話	現住所で申請	下郷/楠/横山
H	居宅（57 女）	—	2 月	民生委員からの連絡	現住所で申請	下郷/田口

※申請後の身元調査に姿を現さず、連絡が取れなくなった。

※※生活保護の相談や申請はしなかったケース

※※※窓口に相談に行ったが申請せずに終わったケース

野宿をしている方からの相談は 8 件中 6 件で、うち 4 件が生活保護申請の同伴、2 件が居住スペースを保有する他の支援団体への紹介となりました。また、支援が始まるきっかけは、炊き出しや夜回りによって脱路上を希望する人と出会ったという場合（つまりこちらから働きかけて支援につながった場合）が 4 件、電話やメールによる問い合わせがあった場合（つまりあちらからの働きかけで支援につながった場合）が 2 件となっています。

一方、部屋のある方からの相談は 2 件あり、本人からの相談と本人ではない第三者（民生委員）からの相談がそれぞれ 1 ケースで、いずれも生活保護申請の同伴をしています。

今回労福会が相談を受けた方の特徴として 20 代から 40 代の比較的若い年齢層が多いと

いうことを挙げることができます。また、野宿歴も短い人が多く、路上に放り出された直後の人たちに対応できているという点で評価できると思いますが、他方で長期間野宿状態にある人たちへのアプローチが課題であることを示してもいます。

1-7-2. フォローアップ活動

当会のなかでも何度も確認されていることですが、脱路上そのものは当事者の方たちにとってゴールではありません。それはその人の生活の立て直しが始まったことを意味しているものであり、その後の生活をどのようにして過ごしていくかがより重要です。

しかしその人に寄り添いながら継続してかかわり続けることは、現在の当会の力量を考えてみても厳しいものがあります。ただ、活動を通して知り合った以上、その人の生活が安定したものになっているかは、非常に気になることであり、「できる範囲で」という条件が付きますが、ささやかなかかわりを続けているところです。

ところで、このフォローアップ活動に限らないことではありますが、こうした個別的な支援を行うとによって、当事者の方たちを様々な背景を抱えた「生活者」として感じることができるのはとても重要なことだと思います。例えば生活保護費の削減が政治の問題としてマスコミなどで取り上げられたときに、「ああこれでは〇〇さんの生活は大変になるだろうな」といった具体的な想像力を私たちにもたらし、無関心ではいられなくする作用があると思います。私たち労福会が当事者の方の生活上の困りごとなどにすべて対応していくことは難しいかもしれませんが、ささやかなかかわりが私たちの社会の見方を広げてくれるという意味があることは間違いないと言えます。

フォローアップ活動（2月末日現在）

年齢・性別		月 日	活動の主な内容		訪問者
C	46 男	10 月 5 日	ガス利用手続きの補助	本人宅	高田
		10 月 15 日	安否確認	本人宅	山内
		10 月 27 日	ミュージカル鑑賞同行	国際大学	下郷/高田
		12 月 2 日	買い物（冬物衣類等）同行	札駅周辺	下郷/小笠原/山本
		3 月 1 日	安否確認	本人宅	山内
I ※	39 男	12 月 3 日	引越しの相談	喫茶店	高田/堀
		12 月 4 日	担当CWとの相談同席	本人宅	高田
E	38 男	2 月 27 日	近況報告（本州へ仕事に行く）	喫茶店	下郷/高田/細田
D	65 男	2 月 27 日	安否確認	本人宅	坂本/下郷/高田
J	56 男	10 月 13 日	安否確認	本人宅	高田/松浦
		2 月 27 日	安否確認	本人宅	坂本/下郷/高田

※ I さんは今回初めて労福会に相談してきた人

1-7-3. 病院同伴とお見舞い

今年度は当事者の方が病院に診察に行くことに同伴する活動が増えたことを大きな特徴として挙げることができます。これは今年度入会した会員（井上さん）の尽力が大きいのですが、当事者の方たちの意識を大きく変えるものとなりました。炊き出し相談会の報告で書かれているように、当会ではこれまで札幌市と共催で健康診断を行っていますが、その利用者数は年々減少しており、ここ数年はほとんど利用する人がいませんでした。これは「どうせ検診しても治療してもらえない」というあきらめの気持ちが当事者の方たちに広がっていたことが大きかったようです。

今年度は勤医協病院の無料低額診療の情報を夜回りなどで伝えることを通して、自分の身体のことを気にする意識を持ってもらうことに努めました。その結果、何名かの当事者の方から健診を受けたいという申し出を受け、実際に治療を受ける方も出てくるようになりました。検診で具合の悪いところを指摘されることで、治療の必要性を自覚し脱路上を考えるきっかけになるという効果もあることがわかりました。また、「夜回りで勤医協なら診てもらえると聞いたから」と、体調を崩した当事者の方自ら救急車を呼んで（正確には周囲にそう伝えて救急車を呼んでもらった）入院するという事例もあり、あらためて必要な情報を伝え続けることの大切さを感じるようになりました。

もちろん課題もいくつかあります。例えば病院の同伴は非常に長時間に及ぶため当会メンバーの負担が大きいということ（そのため実質的にできる人がほとんどいない）、無料診療は期間が決められており（1 か月）、それを越える治療はできないこと、つまり生活保護を受給することが必要となってくるため申請する意思のない人（申請をためらっている人）の利用はかなり限定的になってしまうことなどです。

とはいえ、自分の体調を意識するということは、当事者の方が脱路上を目指すきっかけとして非常に有効であるのは間違いありません。課題は大きいですが当会でこの活動をどのように位置づけるか、前向きな議論をする必要があると言えます。

病院同伴/お見舞い訪問（2 月末日現在）

年齢・性別	月 日	搬送・訪問先	内容等	受診の経緯等	同伴・訪問者
C 46 男	10 月 2 日	大谷地病院	精神科問診同伴	生保申請	大瀧/下郷/高田/山内
	10 月 3 日	社会保険病院	整形問診同伴	救急車搬送	高田/山内
K 61 男	11 月 13 日	勤医協札幌	無料検診同伴	夜回り	井上
	12 月 10 日	勤医協札幌	無料検診同伴	前回受診の続き	井上
L 64 男	11 月 19 日	勤医協札幌	無料検診同伴	夜回り	井上
	12 月 3 日	勤医協札幌	無料検診同伴	前回受診の続き	井上
M 77 男	1 月 15 日	勤医協札幌	無料検診同伴	夜回り	井上

年齢・性別		月 日	搬送・訪問先	内容等	受診の経緯等	同伴・訪問者
N	56 男	1 月 24 日	勤医協中央	手術	救急車搬送	山内（病院より呼出）
		1 月 25 日	勤医協中央	入院見舞		井上
		1 月 27 日	勤医協中央	入院見舞		井上
		1 月 29 日	勤医協中央	入院見舞		井上
		1 月 30 日	勤医協中央	入院見舞		小笠原
		2 月 1 日	勤医協中央	入院見舞		井上
O	56 男	2 月 4 日	北大病院	I C U 搬送	救急車搬送	下郷（高田/山内）
		2 月 5 日	北大病院	入院見舞		下郷/高田
		2 月 13 日	川西内科病院	入院見舞		下郷
P	67 男	2 月 7 日	勤医協中央	高血糖？入院	駅職員から連絡	楠
		2 月 10 日	勤医協中央	入院見舞		井上/楠

1-7-4. 脱路上支援活動の課題

生活保護申請や病院受診の同伴、あるいは居宅訪問等の「その後」のお付き合いなどは、一人の当事者の方と比較的長い時間を共有することになります。そして個別的な対応を必要とする分だけ、その人の生活状況が改善していることを感じることであった時には、支援する側としての喜びも大きいものがあります。そういう意味で脱路上支援活動は支援する側にとって最もやりがいを感じやすい活動の一つであるといえるでしょう。

しかし、その反面で個別的な関係を築いていくための配慮を必要とすることや支援のために割く時間がかかなり必要となることなど、メンバー個々の負担が大きくなる活動であるとも言えます（もっともそのこと自体がやりがいにつながっていくのではあります）。また、慢性的な人手不足状態が続いている当会では、こうした脱路上支援活動にかかわることのできる人が限られてしまうため、特定のメンバーに負担が集中しているのが現状です。当会の携帯電話を持っている事務局長は直接当事者からの連絡を受けることが多く、同伴等を担う人が見つからなかった場合は自分に対応しなければならないため、特に負担が大きくなってしまうと思います（人が見つからずに自分も対応できないときの心理的負担はさらに大きいものとなります）。

この問題は当会の会員数が減少しているということが大きな要因でもあるのですが、ここでは炊き出し相談会や夜回りに比べてなかなか参加する人が増えない脱路上支援活動に特化して、そこにかかわる人を増やしていくにはどうすればよいかを考えたいと思います。

先述のとおり大きな原因は負担感の大きさにあると思います。生活保護申請の際に窓口の職員とやり取りすることや、病院受診の際に医師や MSW の話を聞くといったことが、専

門的な知識が必要なのではないかという「ハードルの高さ」になっているのかもしれませんが。また、居宅訪問をする際にうまくコミュニケーションをとることができるかどうかという不安を持つことも多いと思います。もちろん必要な支援を的確に行っていくことは重要なことであり、メンバー個々の知識や支援の技術を高めていく必要があるのは言うまでもありませんが、大変そうなイメージが先行して「新規参入者」が増えない理由になっている面もあるようです。

この問題をどのように解消すればいいのでしょうか。

人手不足が深刻な中で実際にできることは限られてしまっていますが、まずは大変そうなイメージを払しょくしていく作業が必要であると思います。もちろん負担の大きさは否めないものではありますが、この活動はそうした負担を補って余りある「面白さ」や「やりがい」を見いだせるものであるという積極的な面をもっと当会内部で分かち合ってもよいのではないではないかと思います。出会ったころは憔悴しきっていた当事者の方が見違えるほど元気になった、穏やかな表情を見せてくれるようになったという話は、会員たちが活動の意義を確認できてより活動を展開させていくモチベーションを上げる効果があるのではないのでしょうか。

そのため情報共有の場として事例検討会をもっと頻繁に開催することを検討してもいいのかもしれませんが。また、現在フォローアップ担当に集約されている記録は、普段閲覧することができません（個別に応じる場合はありますが）。個人情報の問題がありますが、当会内部でもっと気軽にアクセスできるようにするといった対応も必要になると思います。

1-8. 学習会・講演会

「労働と福祉を考える会」、という名称にもあるように、当会は当事者への支援活動だけでなく、そうした貧困問題に繋がる幅広い問題群を深く理解することをも目的としています。現在、当会では夜回りや炊き出しなどの活動の中で、当事者の方と接する機会を多く持っていますが、そこでの出来事をより広い問題の一部として理解し、ホームレス問題とも関連する社会保障・労働などの問題について理解を深める機会を持つことは、「考える会」としても、また支援をより発展させる上でも重要であると言えます。

そのような意図のもと、今年度は学習の機会として、不定期での学習会および講演会を企画・実施しました。学習会は会員内部でのものですが、講演会などの企画は市民一般に開かれているため、当会内部だけでなく、社会一般へホームレス問題についての理解を広めるための機会にもなっていると言えるでしょう。

学習会については、大滝が学習会係として12月の会議で任命され、1,2ヶ月に一度ほどの頻度で学習会を行うことが運営会議で決められました。また、関連して学習会で用いる（可能性のある）文献などの資料購入費が予算より計上されることが決められました。

今年度は、外部から講演者を呼んでの二回の講演会と、それと関連して一回の学習会を行いました。以下、それぞれについての報告です。

1-8-1. 今井誠二さん講演会

概要

日時	2012年12月15日（土）13:30～16:30
会場	北海道クリスチャンセンター ホール
講師	今井誠二さん (NPO 法人 仙台夜まわりグループ 理事長)
講演テーマ	「路上生活者支援 13年の歩みと東日本大震災」
来場者	18人

① 企画の意図・当日の様子

12月15日（土）の13:30から16:30まで、北海道クリスチャンセンターの大ホールを借りて、仙台夜回りグループの今井誠二さんを招き、「路上生活者支援13年の歩みと東日本大

震災」と題した、講演会を開きました。当国会報「ともに生きる（No26）」での報告と重複する部分もありますが、以下に記します。

支援者数とホームレス人口が圧倒的に多い東京や大阪でなく、なぜ仙台の人をお願いしたかと言うと、やはり東日本大震災から 2 年近く経過し、あの時に、仙台のホームレス・支援者はどうしていたのだろうという素朴な疑問を感じたからでした。

講師の今井誠二さんは、仙台の尚綱学院大学の准教授が仕事上の肩書きですが、バプテスト仙台南キリスト教会の牧師でもあり、NPO 法人仙台夜回りグループの理事長という立場でも活躍しています。

講師のお話は、13 年前の雪の降る公園で段ボール 1 枚をひいて寝ているホームレスの光景から始まりました。その後ワールドカップ開催の時に、ホームレスの排除が始まった事、当初カトリック教会の援助で活動が続けていたが、考え方の違いから独立した会を設立したこと、一般市民から見たホームレスに対する、見知らぬ者への恐れから来る「排除したい」という気持ちに遭遇して、何とか理解して貰おうと尽力したことなどを聞きました。

震災時は、自分達の経験を生かして、被災者に対して 1 日に 6 千～1 万食を供給したそうです。震災後、路上の人々の顔ぶれは以前と変わり、全国のいろいろな所から 30～50 代の人が仕事を求めて仙台に集まり、思ったほど仕事先が無くまた十分な賃金をもらえなかったりして路上に溢れ出る現象が起っています。そのような中、決して充分とは言えない施策の行政に働きかけて、仙台福祉プラザで野宿者に対するシャワー事業を開始したり、医療券の配布、ラジオ体操の行事を始めたなど、参考になるお話もたくさんありました。

② 反省点など

講師の来歴紹介のあと、今井さんが持って来た、仙台夜回りグループの動画映像を 15 分の予定で見ました。しかし、映写している途中で動画が凍り付いてしまい、急遽今井さんの機転を利かせたお話で、対応していただく事になってしまいました。運営側の準備不足で、講師と来場者の皆様に迷惑を掛けてしまいました。

広報の手段としては、北海道新聞の HP に掲載申し込みをして掲載されたことや朝日新聞の紙面に掲載させてもらったこと、反貧困ネット北海道の HP に掲載してもらったことの 3 点です。しかし当日ふたを開けてみると、来場者は 18 名と低調で、口コミなどで広く情報を広める努力が足りなかったと反省しました。成果としては、奇しくも当会と同じ頃に活動を始めた仙台夜回りグループさんの生い立ちなどを聞くことが出来、私たちの活動に大変に参考になりました。一方で、一般市民の皆様に対するアピールは、力不足を感じ、講演者の今井さんにも申し訳なかったという気持ちで一杯です。

1-8-2. 丸山里美さん講演会および事前学習会について

概要

日時	2013 年 1 月 26 日（土） 17:00～19:00
会場	北海道大学 文系棟 W309
講師	丸山里美さん (立命館大学 産業社会学部 准教授)
講演テーマ	「女性と貧困—路上の視点から」
来場者	45 人

① 講演会の意図、事前学習会

今年度二度目の講演会では、2013 年 1 月 26 日に、立命館大学産業社会学部准教授の丸山里美さんをお呼びして「女性と貧困—路上の視点から」と題した講演会を北大にて行いました。丸山さんは女性ホームレスの研究をされている数少ない研究者の一人であり、そしてホームレス問題とも関連する形で議論されているスクウォッティング²についての研究もされている方です。従来、ホームレスについての研究・支援は、それを行う側（主体）も行われる側（対象）でも、男性が想定されてきました。しかし、そうした男性中心的な状況にあっては、多様で複雑であるホームレス問題を理解するための枠組みとしては限界があります。事実、当会が行なっている概数調査においても、女性ホームレスが確認される件数は近年増えておりますが、彼女たちがどのような背景のもとに路上生活をしているのか、ということは当会としても正確に把握できていたわけではありません。彼女たちへの支援を考える上でも、当会自体の運営の場においても、ジェンダーという変数を考慮していくことは、不可欠なことであると言えます。丸山さんには、このような事情を踏まえ、(女性) ホームレスが置かれている問題を多角的に考える機会を得るということを目的としてお呼びしました。

この講演会に先駆けて、2012 年 12 月 22 日には丸山さんの論文「ジェンダー化された排除の過程—女性ホームレスという問題」（青木秀男編『ホームレス・スタディーズ』収録）を用いて、会員で学習会を企画しました。学習会はゼミ形式で、担当者（松浦聡美）が発表者として要約レジュメを用意し、約 10 人の会員が参加しました。事前学習会を行ったのは、「講演を依頼する以上は、会員としても事前に予習しておくことが必要である」という意識に基づいており、この学習会を通して、丸山さんの研究スタンスなどを把握すること

² 使われていない土地や建物を、法的権利のないまま無断で占拠する活動のこと。これらを単なる非合法行為として捉えるのではなく、生活や社会活動に必要な土地や空間の再分配行為と見なすべきだという議論がある。公園に寝泊まりする日本のホームレスもスクワットをしているとすることができる。

ができたのではないかと思います。

② 当日の様子

当日は北大文系棟 W309 室にて行い、45 人の来場者がありました。会場の雰囲気としても大体の席が埋まっており、盛況であったと言えるでしょう（来場者数については丸山さん自身も「予想以上だった」と驚いていました）。多くの方が足を運んでくださった背景には、女性ホームレスについての問題へ関心のある方が多いということに加え、事前の広報（関連する北大の授業での宣伝や各研究室への告知、掲示板へのビラ貼りなど）が奏功したのではないかと考えられます。

講演会の内容は、女性ホームレスについての報告が 3 分の 2、スクウォッティングについての報告が 3 分の 1 ほどで、その後休憩を挟んで会場との質疑応答を行いました。会場からも積極的に質問や意見などが出て、活発に意見交換が行われました。また、終了後は丸山先生を囲んで、交流会を行いました。

講演後に回収した来場者へのアンケートによれば、講演会は概ね好評で、「女性ホームレスの背景に、具体的なイメージが持てた」「ホームレスや貧困をより広い視野でとらえることができた。ジェンダーや労働、法律などの関連するお話も聞けてとても勉強になった」といったコメントが見られました。一方で、統計などの一般的な話ではなく「女性ホームレスの方の現状を。もっときめ細かい内容と事例で聞きたかった」といった意見もありました。

③ 反省点など

今年度、WAM に申請した予算として、手話通訳者謝金が計上されていました。そのため、講演会の際に希望者がいれば、手話通訳者を用意する旨を講演会チラシに記載したところ、丸山さん講演会の際に、ろうあ者の方から依頼を受けました。この方からは、前回の今井さん講演会の際にも反貧困ネットの平田さんを通じて、手話通訳の依頼が届いていましたが、その際は結局一週間前にキャンセルになっていました。今回、札幌聴力障害者協会に依頼 FAX を送付し、電話でも 2, 3 度打合せをしたのち、通訳士 2 名の方に来て頂きました。

しかし、講演会当日は、そのろうあ者と通訳者にとって、必ずしもスムーズな進行とは言えませんでした。具体的には、スライドを映写するとき、「照明を消したほうがいい」という意見が会場から出て照明が消されたのですが、それによって一時通訳者が見えなくなってしまった事が 1 つ。また、質疑応答の際に発言した方の声が小さく、通訳者が「もう少し大きな声でしゃべってください」と頼んだのですが、なかなかはっきりとわかりやすく発言してもらえなかった事。これらについては、事前にろうあ者と通訳士が要ることの

意味を周知していれば改善していたとも思われます。

ちなみに、会場となった教室では、マイクを使用できる予定だったのですが（教室予約の際に教務にも確認済み）、大学教務の不手際かマイクが用意されておらず、講演者・発言者が地声で話さなければならなかったことも、上記の問題と関連しているとも言えます（「講演者の声が聞き取りづらい」とコメントしている来場者の方もいました）。また、プロジェクター機材の準備などにも手間取り、丸山さんにもご迷惑をおかけしたことを考えると、そうした準備や段取りなどについては、会員内で周到に確認してから臨む必要があったでしょう。

1-8-3. 課題、反省点などを踏まえて

まず学習会についての反省点としては、年度の後半で学習会系の設置が決定されたこともありますが、「1、2ヶ月に一度を目安に」と言いながらも、一度しか行うことができませんでした。学習会の機会は他の活動との兼ね合いもあるので、必ずしも定期的に出来ないこともあります。現場での当事者との関わりの他にも多様な形で学習の機会が設けられることは、必要だと言えます。

また、学習会係が設けられる際の会議や12月に行われた学習会では、「支援に直接繋がらないような学習会ではなく、あくまで支援に軸足を置いた事例検討会などを優先すべきではないか」といった意見もありました。今年度は、当事者との具体的な関わりについて考える事例検討会がほとんど行われていないため、こうした意見が出るのは当然であり、その機会を確保することが重要なのは言うまでもありません。ただし、人員もスケジュールも限定されているなかで、どのように学習会の機会を設けていくかは、これからも話し合って決めていく必要があるでしょう。

講演会については、二回の講演会とも全体的に当日のセッティングでの粗さが目立ったので、事前に当日の準備の段取りなどを確認しておくことは必要だと言えます。また、講演者について事前（あるいは事後）に関連する学習をしておくことは、講演会を行う上での効果を上げることに繋がるとも言えます。たとえば、学習会で読んだ文献などの著者を招いて講演会を企画する、といったように学習会と講演会の企画をリンクして行う方法なども考えられます。

外部から講師を招いて講演会などを企画することは、これまでの当会の活動の中で、あまりコンスタントに行われてきたわけではありません。近年はWAMの助成金などでそのための予算を確保していますので、こうした機会を積極的に利用して、学習の機会を設けていくことが好ましいと思います。

1-9. 広報

今年度の広報活動は、主に以下の4通りの方法をとって行われました。

① 会報

今年度前半は事務局長と広報係の不在ということもあり、会報「ともに生きる」は第26号のみの発行となりました。500部印刷し、会員に送付したのに加え、当事者への配布も行いました。

② ウェブサイト

今年度はホームページの更新が活発に行われませんでした。今までネット上に掲載されていなかったいくつかの発行物をアップロードしたことで、より多くの過去の活動記録が閲覧可能となりました。現在は、新しいホームページを作成中で、年度内の公開を目指しています。

他に、まだ内容が不十分ではあるものの、facebook上や北大のサークル関係のサイトに当会のページを作成し、市民や学生が当会の活動を知り参加するための窓口を増やしました。

③ マスメディア

4月にUHB報道部から夜回りに関する取材を受け、UHBスーパーニュースで取り上げられました(4/12放送)。また、北方ジャーナルからは、11月に生活保護受給者の増加に関する取材を、1月には人数調査の取材を受けました。

その他、各新聞社からも取材を受けています。

④ 大学・講演での広報

学内に活動への参加を呼び掛けるビラをいくつか掲示しましたが、反響はさほど感じられず、頻繁に活動に参加する学生が今年度は非常に少ない結果となりました。

今年度は札幌国際大学と酪農学園大学から依頼を受け、札幌の野宿者に関する授業を各1回ずつ行い、その中で当会の活動についても紹介しました。

また、外部の方をお招きして開催した二度の講演会にて、参加者には会報やその他当会の活動に関する資料を配布し、宣伝を行いました。

1-10. 助成金

1-10-1. 概要

昨年度から引き続き、独立行政法人福祉医療機構（通称「WAM」）の助成金を利用して、当会の事業を行いました。昨年度は総額 153 万円の助成を受けましたが、今年度は予算を縮小させ、およそ 94 万円の助成金を受けました。これは、昨年度の総会資料でも述べましたが、WAM の助成金は規則が煩雑で、しかも本会会計と別の WAM 専用の口座を開設して管理しなければならず、会計担当および会員の負担が倍増した経験から、その反省として規模を縮小しようと考えたためです。

2 月末日現在の WAM の予算執行状況と当初に申請した予算割は以下の通りです。

	予算（円）	執行状況（円）
人数調査	300,000	269,440
夜回り	121,800	62,846
炊事雑煮会	132,200	107,997
講演会	183,400	151,535
同伴・フォローアップ	28,000	29,790
炊き出し・相談会	297,160	298,557
報告書	47,000	0
通常経費	30,000	18,900
合計	1,145,560	939,065

注 予算が助成額を超えているのは、当会会計からの補填と併せて、事業予算全体を計算しているため

1-10-2. 課題

昨年度は、当会の会計担当と WAM の会計担当の計 2 名で予算執行にあたりました。今年度は、1 人が双方の会計を兼任した体制で行い、2 名の間の連絡調整の手間が省けた反面、仕事量は単純に考えて 2 倍となりました。来年度、WAM の助成金を利用しようとするなら、仕事に忙殺されないように慎重に協力体制を構築する必要があります。当会会計が、2 月である現状では、3 月決算の WAM との経過処理も難しい問題です。また、会計処理に関しては経験が無い会員には難しく、専門的な知識をアドバイスする者が必要だと思われます。

1-11. 来年度に向けて

本来ならばここで来年度に予定する活動内容を提示すべきかと思いますが、現時点では十分な話し合いが行われていないため、会全体の決定とは別に、会議等の場でスタッフから挙がっている課題を以下に記しておきます。

1. 新規スタッフの定着

事務局長の不在から始まった今年度ですが、定期的に活動に参加するスタッフも次第に減少し、特に現在では毎週のように夜回りに参加する学生のスタッフはほんの数人です。しかし、炊き出しや夜回り、人数調査における初参加者は少なくないため、初参加者の受け入れ体制を、今一度考える必要がありそうです。

2. 夜回りで会う当事者の減少

今年度の秋ごろから、夜回りでカウントされる当事者が減少傾向にあります。これを、札幌市の政策が功を奏しているとするのか、まわる場所や時間帯が悪いのか、当事者が当会を避けているのか、あるいはもっと私たちの気づかないところに原因があるのかはわかりませんが、今まで同様、試験的に開始時間をずらしたり、当事者への聞き取りを行ったりするなど、思いつく限りの原因に当たってみようという話になっています。場合によっては今後夜回りのやり方を大幅に変更するかもしれません。

3. 脱路上者のフォローアップ

毎年言われていることですが、今年度も脱路上者へのフォローアップが十分には行われませんでした。単に、居宅訪問の回数を増やすというのではなく、短いスパンでスタッフが入れ替わる当会でも無理なく続けていける方法を探る必要があります。また、今年度は当会の活動に積極的に関わってこうとする脱路上者が数名みられましたが、それを受け入れる準備が整っておらず、また現野宿者への影響も懸念されたため二の足を踏んでしまいました。来年度はそういった意志のある脱路上者の受け入れに関して会としての方針を示すと同時に、脱路上者が当会以外にも居場所を得ていくプロセスについても早急に案出しなければなりません。アパートを一室借りて当事者の居場所を確保する、といった案も出ていますが、当会では前例の無いことですので、他団体の活動を大いに参考にし慎重に検討していく必要がありそうです。

4. 情報共有

これまで、会員同士の情報共有は主に夜回り後の報告や会議、メーリングリスト等によって行われてきましたが、特に当事者の個人情報について、中心となってお付き合い

していた会員がいなくなると、後に必要となった場合にその当事者の詳細な情報が得られないことが多くありました。デリケートな部分なので扱いには十分注意しなければなりません。今のところ、必要なときに必要な情報が得られる方法として、**access**等のデータとして一括で管理するという案が出ています。また、会議は月1回で毎回2、3時間を要しており、会員の負担増加や即応性の低さの原因となっているので、夜回り前の30分ないし1時間を会議に使うことでこれらを解消していく予定です。

5. 炊き出しの方法

今年度は、利用者から炊き出しでの散髪や衣類配布等の順番に関する不満の声が多くあがったり、会話もなく食べるだけで帰ってしまう利用者が目立ったり、また調査によって利用者の多くが居宅であることが判明したりするなど、炊き出しの意義について根本的に考え直さざるを得ない状況に置かれています。今後、様子を見つつやり方を変えていく計画ですが、その場合には周到に告知を行うことで、利用者の不満や不公平感を軽減させ、理解を得ていくことが肝要になると思われます。

6. 市民へのアピール

最後に、これは特に会議で話題になってはいませんが、個人的に、学生を含む市民に対する広報が不足しているのではないかと考えています。時にはビラを作って学内に撒くこともありますが、その多くはスタッフの募集であったり講演会の告知であったりして、活動そのものの宣伝ではありません。活動に参加している市民がほんの一握りであっても、そういう活動があるという事実を積極的に広めて、より多くの人に関心を持ってもらうことも、当会の大事な務めかと思います。非常に地味で、すぐに効果が見られるものでもないため学生は好まない仕事かもしれませんが、HPや市報、ラジオ、フリーペーパー等の媒体を使ったり、あまり専門的になりすぎない市民向けのイベント（札幌のホームレスの実態に関する講演や活動報告等）を開催するなど、来年度は市民に対する広報にも力を入れていきたいと思っています。

2. 審議事項

2-1. 2012 年度会計報告（当日）

2-2. 2013 年度役員体制（当日）

2-3. 2013 年度活動計画（案）

[1] 会議

会議名	時期など	内容
総会	2014 年 3 月頃	2013 年度活動報告や決算報告および 2014 年度の活動計画や予算案の提示
運営会議	原則として毎月	会の運営に関する議論を行い、必要事項を決定する。
事務局会議	必要に応じて	特に事務的な事柄に関する議論や、運営会議の準備を行う。

[2] 夜回り

夜回りは、定期的に札幌市中心部を歩いて回りながら、（１）野宿者・生活困窮者を見つけ出す、（２）野宿者の実態を知る、（３）（脱路上を促す前段階として）何度も会って会話することにより信頼関係を築く、（４）情報提供をする、といったことを目的としています。

[3] 炊き出し

炊き出しでは夜回りよりも、野宿者および生活困窮者と話をする時間を十分にとることができ、加えて、炊き出しでは他団体との協力によって、専門家による法律などの相談会、衣類提供などの、比較的充実した支援をすることができます。また、炊き出しに参加するスタッフ同士、または、スタッフ（経験者）と初参加者の交流の場ともなります。

[4] 考える活動

活動名	内容
意見交換会	夜回りや炊き出し、会の活動の意味・意義などについて幅広く意見を交換する。
各大学別学習会	各大学において、放課後や昼休みなどの空いた時間を利用して貧困問題や利用できる制度などについての学習会を行う。

事例学習会	個別のサポート記録をもとに、支援の際の問題や、必要な知識・情報等を共有し、よりよい支援に結び付ける。
他団体・施設の見学会	ベトサダ・なんもさや明啓院等の他の支援団体・施設や救護施設を見学することにより、活動に関わる知識について学び、支援活動に生かすことを目的とする。
講演会	道内外から実務家・専門家等を招き会の活動に経験やノウハウを反映させる。
各種調査	札幌以外のホームレス状況・貧困の実態について調査する。

〔5〕 調査、脱路上後の支援

活動名	内容
野宿者概数調査	8月頃と1月頃を予定
脱路上後の支援	居宅訪問、年賀状や誕生日カードの送付、食事会等、その他脱路上者への相談を含む支援活動

〔6〕 広報活動

会報の発行	2013年度版を複数回発行
ホームページの更新	活動内容を定期的に更新することで、会員だけでなく一般の人々にも広く活動を周知させる。

2-4. 2013 年度予算案（当日）

3. 私と労福会

今年度も、労福会の活動に関わってきた人たちに、活動に参加して考えたことや会に対する批判・意見などを自由に書いてもらいました。普段なかなか活動に顔を出せない人や、最近活動に参加し始めた人もいますが、それぞれの思いの丈をぶつけてもらいました。

「どうなんでしょう」

小笠原 淳（フリーライター）

年度当初に事務局長が空席になってしまった時は「ついに解散か」との思いがよぎり、すぐに職業病が頭を擡げて「これはニュースじゃ」と色めき立って顔を脂ぎらせてしまったことですが、ほどなくして高田晃太郎くんの登板が決まり、あいにく、否さいわい、スクープを手中にする結果とはなりませなんだ。まあ、よろしゅうございました。顔は今も脂ぎったままですが。

とはいえ、歳をとると時間の経つのが早いもので、気がつくともう 3 月。よく考えたら「歳をとる」とかに関係なく、万人にとってもう 3 月、年度末。事務局では「次をどうする」という話になっているだろうと思うのですが、どうなんでしょう。この「どうなんでしょう」という言い回しは質問のようで質問でない、なに訊いてるのかわからん趣きの、しかし訊く側にとっては甚だ便利な投げかけでして、記者会見とかでこういう問いが出ると訊かれた人はけっこう困ったりするわけです。ということを踏まえ、敢えてどうなんでしょう。

前世紀に労福が産声を挙げたころには「この会はいつまで続くのか」なぞ考えもしませんでした。正直なところ、10 年以上続くとは思っていませんでした。顔も脂ぎっていませんでした。で、存続そのものが目的になってはいかんだろうと思う一方、とはいえこの会がなくなってしまうのはやっぱりちょっと、どうにもこうにも、なんともかんと、まだまだこれ、もう暫らくあんなことやこんなことに踏ん張って貰わなくてはいかんよなあ、とも思うことです。さりとて当方、鉛筆よりも重い物を持つことができない身体。何の役にも立たず漫然と「どうなんでしょう」と嘯きながらネタを求めてばかりで、毎度ながら甚だ申しわけないことです。

とりあえず顔を洗おうと思います。

「労福会とわたし」

成田 允子（市民ボランティア）

例年になく大雪と寒さで路上の彼らは、ことのほか今年は厳しい冬のように思います。

私は体調不良で労福会の活動を休んでいます、通院などで街に出かけると、顔見知りの人たちが声をかけてくれます。「しばらく見ていないけどどうしたの」「具合が悪いんだって・・・?」「あの人はこうなったよ・・・」等々。

いずれも、最後は私の体調の話になって「もっといい病院にかかれば」「移植という手はないの」「今の医学で治らないはずはないよ」などと真剣にアドバイスしてくれます。

日常生活に不自由を感じているとはいえ何とか生活している私を、今夜さえも無事過ごせるか分からない彼らに心配してもらうのは、なんだか不思議な気分です。

野宿生活を送らざるを得ない彼らの事情はさまざまですが、人間関係が一つの要因ではないかと感じています。

それは、子供時代の不幸な体験であったり、学校や職場でのつらい経験が引き金となっているのですが、どこかでこの人間不信の負の連鎖を断ち切らなければ、彼らの生活は破綻したまま、社会から隔絶されてしまいます。

日常的に信頼できる親密な人間関係を保つ事や、日々一貫した思いやりのある関係を築くことは、一朝一夕で出来る事ではありません。なかなか困難で、また苦痛をとまなうこともあります。時には荒々しい言葉で、突き放されることもあります。これは彼らの孤立感・恐怖感・焦燥感の現れだと考えるようにして、ゆっくりと関係を深めることが大切だと考えています。

私たちは失敗、挫折、失望などの困難に突き当たった時、「人のつながりがあれば乗り越えられる」と言われています。喜びや楽しみを共有できる家族や友人・仲間が存在が不可欠で、辛く苦しいことも家族や親密な人のためなら頑張ってやり遂げられるし、たくさんの人と関わりあっていくことで、多くのことを学ぶことができます。

人との関係が生活に楽しさと呼び込み、人間らしく生きることの意味を自覚し、自らが成熟するチャンスを与えられているのだと思います。

人は弱いものなので、野宿生活の彼らだけが特別な存在ではなく、お互いの弱さを受容し、支えあってともに生きる喜びを分かちあいながら成長し、成熟した社会を創ることが大切だと思います。

「読書感想文」

内山 明（北海道大学農学部3年）

労福会で活動をして「勉強になりました」「いい経験になりました」と言う人もいれば、「わからないことが増えました」と言う人もいます。わたしはわからないことが増えている。言葉にできない違和感と浮遊感を積もらせていた2012年3月、作家・ジャーナリストの佐々木俊尚が『「当事者」の時代』を著したことを知り、発売から12日後に書店で手に取り一直線にレジへ運んだ。

中心テーマはメディアである。『「当事者」の時代』は自己啓発書でなく、ただメディアを批判するだけでなく、〈マイノリティ憑依〉という現象を生んだ歴史を明らかにしたところに、この本の新しさがあった。佐々木俊尚が名付けた〈マイノリティ憑依〉とは弱者や少数派を勝手に代弁する現象である。メディアは〈マイノリティ憑依〉によって社会のゆがみを描こうとした。そして〈マイノリティ憑依〉をした記事は、伝える側にも受け取る側にも「あなたはどうするんですか」と問いかけることはない、と筆者は問題提起した。

これは痛い指摘だ。ずっと前、労福会に初めて参加した人にわたしが「あのホームレスの人はこんな事情を抱えているんですよ」と解説したら「へえそうなんですか」と軽く流されたことがあったし、似たようなできごとが何度もあった。わたしも〈マイノリティ憑依〉をしていたのかもしれない。

また佐々木俊尚はこうも述べている。(要約)「弱者のことは伝えたい、でも相手の位置と自分の位置の間に絶望的な距離があることを知るのが必要。そして伝える」似たようなことをわたしも感じていた。ホームレス問題の可視化は必要だが、どう伝えればいいのかわからないし、わたしがホームレス問題にどう関わればいいのかわからないのだ。札幌市内でホームレスからの生活保護の受給開始の件数が1年間で200件以上あったと知ったときは驚いた。(もちろん年により増減はあるが。)つまりホームレスの人の中のほんの一握りとしか労福会は関わっていない。居宅に移る人がいる一方で何年間もホームレス生活を続ける人もいる。あるホームレスの人に「なんで家で暮らさないんですか」と尋ねたら「ご近所さんが怖いから」と言われ、日を改めてまた尋ねたら「いっぱい疲れたからいっぱい休んでる」と言われた。この人とはもう30回くらい会っているが、会うたびに新しい発見があり、会うたびにわたしの立ち位置がわからなくなる。脱路上を勧めるだけが支援じゃない。ホームレスの人への理解と共感とエンパワーメント、この三つの意味はどう違うのだろう。

わたしがホームレスの人に会う理由は、わからないことが増えているからだ。

『「当事者」の時代』を読んで、活動しながら積もった違和感と浮遊感をすこし言葉に変換できた。批判も多い一冊だが、読んでみてほしい。

「支援の原動力」

横山 悠子（北海道大学文学部2年）

私と労福会の関係はまだ浅い。会員になって若干1ヶ月、数える程しか会の活動には参加していない。参加理由も大学の先輩に誘われたからなんとなくであった。そのためか、路上者の方々に対して強い感情を持ってないでいる。会員の方々が路上者の情報を把握し、どうすればより良い支援が行えるのかと心を砕く姿には、ただひたすらに尊敬を覚える。そして同時に、なぜそんなことに打ち込めるのかと不思議に感じる。路上者の生活苦には

憐憫を感じるし、悲しくなるし、それを生み出す社会に問題意識も覚える。けれども、そんなこと実はどうでもいいと思っている。自分の生活上のちっぽけな不満の方が何倍も気にかかる。夜回りへの参加を重ねて路上者の方々と顔見知りになれば、行動の原動力となり得る強い共感や義侠心を感じることができるようになるだろうか。労福会に参加することで、私は私の導火線に火をつけることを期待している。だが、マッチを擦るのもまた私自身であることを忘れてはならない。

「三十七歳の原点」

山内 太郎（札幌国際短大 講師）

労副会の活動を始めてから（再開してから？）、私が家族と過ごす時間はめっきり少なくなりました。もともとマイホームパパというガラでもなかったのに、自分はほとんど気にしていなかったのですが、周囲の同年代の人からすると自分の週末の過ごし方は信じられないようです。たまに羨ましいと言う人もいますが、もっと家族を大切にせよと心配やお叱りの言葉を頂戴することのほうが多いです。おそらく仕事も暇なほうではないと思います。地方の小さな私立短大の教員なんてものは担当する授業のコマ数はベラボーに多く、加えて毎日五月雨式に面談をするという不思議なA0入試という受験業務をこなし、さらに受験生を獲得するために道内各地の高校の進路担当教員のもとに赴いて営業スマイルを振りまき、学外の実習先とのマッチングを調整しつつ、学生の出欠状況をチェックして欠席の多い学生を呼び出して相談に乗るといったことを日々行っているわけですから、それなりに大変です。

今年の労副会は事務局長が不在のままスタートし、私は副代表という役職を仰せつかって炊き出しやら人数調査やらの担当をしたので、ホントに忙しかった。そんな中で大切なメンバーの悲しい知らせなどもあり、ふと自分の中で労副会とは一体何なのかを考えてしまうこともありました。身近な人の気持ちにも気付かないような人間がホームレスの支援をしていますなんてへそで茶を沸かすような話だと言われるのではないかと。振り返ると今年はそれこそ学生の時のようにはしゃいでいたような気がするのですが、学生ときはそれが若さということで何となく周囲も許してくれていたような気がするのですが、それでは今の自分はいったいどのように理解されているのだろうか、最近をよく他人に自分はどう見られているのだろうかということを気にするようになりました。まるで思春期の青年のような気持ちで日々過ごしています。自分の年齢や「社会人（僕はこの言葉が嫌いだ）」であるということで求められる振る舞いと自分自身の内面にある自己像とのギャップに苦しんでいる三十七歳の私です。でも自分のなかにそんな自分をナイスと思っている部分もあったりするので厄介です。

「共感の所在を探る」

高田 晃太郎（北海道大学文学部3年）

この1年は、「ホームレス＝当事者」と呼ばれる人たちに対して、自分がどう関わっていけばよいのかと悩み続けた。

彼らのために何か手助けができたらいいのと思う一方で、いつまでも深く関わり続けていられないよなと思うことがある。生活保護の申請には行ったものの、そのあと、付き合いがまるっきりなくなってしまうことがあった。どうしてもなく難しい事情を抱えた人から相談を受けて、話を聞いているうちに何だか疲れてしまい、途中で投げ出したくなることもある。深夜に電話がかかってくることもあった。酔っているのか、本当にしょうもない用事で電話をかけてくる人もいる。一体いつまでこんなことが続くのだろうと思う。

去年の10月のことだ。

その男性は本州の刑務所から出たばかりで、ある日の夜回りで出会った。顔色が悪く、態度が落ち着かない。「何とかしたい」と男性は言った。僕たちは部屋探しを手伝い、アパートに入ってもらった。2日後、訪ねると、男性は泣きながら部屋から出てきた。ウンコを部屋にまき散らしていたのだ。

いきなり「支援者」と名乗る者たちが現われて、どこなのかも分からない部屋の中に入れて、ずっと不安だったのだろう。2日間、全く外に出ず、ご飯も食べれず、トイレにも行けなかった。このまま死のうと思っていた。男性は泣きながらそう話した。

騙されたのだと思ったらしい。僕たちはもう来ないと思っていた。その涙には、僕たちに対する「謝罪」も含まれていたのだった。

僕たちは内心かなり動揺しながらも、部屋の掃除を始めた。男性は力が入らず体が動かない。僕は服を脱がし、パンツも脱がし、お尻の穴までティッシュで拭きとってあげた。男性は泣きながら、「すみません、すみません」と謝っている。

結局、その男性は、部屋には戻りたくない、嫌な思い出があるし、怖い、これなら路上に戻った方がマシだと言うので、その日はとりあえず、札幌駅で寝てもらうことになった。

次の日の夕方、一人で札幌駅に行くと、男性は北口に突っ立っていた。会うなり「遅い！」と怒鳴られた。昨日、札幌駅で別れてから、北口に立ってずっと待っていたのだという。別に時間を指定して待ち合わせていたわけではなかったのだが、男性にとっては来るのが遅すぎたようだった。「遅くなるなら遅くなるで、事前に伝えることもできたんじゃないか」なるほど。「ごめんなさい……」と一応謝ってみる。ずっと立っていたものだから、足がかなり痛むようだった。男性はしゃがみ込み、「もういい、帰ってくれ！」。何も言えないで

いると、部屋の鍵と、あり金を投げつけられた。「帰れ!」。拾って、男性に手渡そうとすると、「ほっといてくれ!」と、また怒鳴られた。

場所は札幌駅北口。人通りも多い。みんなこっちをじろじろと見てくるのに、声をかけてくれる人は誰もいない。正直、困ったな、と思った。どうすればいいのか分からなかった。男性のそばに腰を下ろす。お互い途方に暮れて、ただ黙って人通りを眺めていた。男性の気持ちも分からないでもなかった。だって、ずっと立って待ってくれていたのだ。

なんか大変なことになったな……。そう思った。

次第に、男性は気持ちが落ち着いてきたのか、「すみません……」とまたもや謝り始めた。「自分のこと、助けようとしてくれているんですもんね」泣きながら、いまさらそんなことを言う。この人はいったい何なんだろうと僕は戸惑っていた。

しばらくして、電話で SOS を出していた山内さんが車で駆けつけてくれた（こういうとき、山内さんはすぐに駆けつけてくれる。本当に頼りになる 37 歳だ……）。その頃には、男性は落ち着きを取り戻していた。さて、どうしたものか。足が痛くて動けないということだったので、救急車を呼んで病院に行くことになった。

救急車に乗るなんて初めてのことだ。男性は隊員に担架に乗せられ、救急車の中へ。僕も一緒に中に入る。山内さんは自分の車で病院へ。病院に向かう間、男性は安心しきった様子で、軽いジョークを飛ばし続けた。「いい社会経験になりますよ」とか言って、それあんたが言うことじゃないだろ……とか思いながら、病院に着いた。足は、思った通り何もなかった。救急車を呼ぶ前から、これは、心配してほしくて大げさに言っているだけだな……と思っていたからだ。

この男性とのエピソードはまだまだ続くし、今も続いている。だけど、この場ではここまでにしておく。とにかく、男性は僕たちと出会ってからしばらく、泣いて、笑って、怒って、そしてまた泣いてと、生きることに精一杯だった。男性も大変だっただろうし、それに付き合っていた僕たちも大変だった。

電話がかかってくる。男性からだ。「雪祭りに連れていってくれないか」「切り抜いた新聞記事を渡したい」ほかにも、本当に、本当にどうでもいいことで電話がかかってくる。男性の気持ちも分かる。刑務所に十何年もずっと入っていて、見知らぬ土地にやって来て、話ができるのは僕たちしかいない。とても寂しいのだろう。だけど……と、僕は思う。

誰かが昔、「労福会は、彼らのための居場所にはなりえないだろう」と書いていたが、僕も、そのように考えていた。学生を頼られたら、その学生も一緒に共倒れしかねないからだ。学生だって、ほかにもやるべきことは沢山ある。

僕にはよく分からなかったのだ。当事者と呼ばれる人たちと、どのように関わっていけ

ばよいのか。また、自分はどのように関わっていきたいと考えているのか。

知識も経験も浅いフツウの学生が、ときに相手の一生を変えてしまうかもしれない出来事に介入する。そこで生じるのであろう責任というものに無自覚だったせいかもしれない。

人に相談してみる。気持ちが楽になることはあっても、どうも確信は得られない。なお悩み続けていると、ふと札幌駅北口でのことを思い出した。お互いどうしたらいいのか分からなくて、途方に暮れながら横に並んでただ座り込んでいたときだ。

あのとき、僕はどんな気持ちだったのだろう。言葉ではうまく言えないが、なぜかやけに優しい気持ちになっていた気がする。あのとき、男性を心から「大変だね」と思っていたような気がするのだ。

当事者とどのように関わっていけばいいのか。また、関わっていきたいのか。今でもよく分からない。だけど、あのときの札幌駅北口のできごとは、その問いについて考える上で大きなヒントを与えてくれそうな気がする。当事者ではない僕が、当事者と付き合っていく中で、ときには腹が立つことがあるし、相手のことがぜんぜん理解できないとき、「何で！」と声を上げたくなるときもある。けれど必要なのは、相手に何か回答を突きつけることではなくて、たとえば共に困惑して言葉に詰まってしまうようなあり方も含めて、共感の所在を探ってみることじゃないだろうか。共感がなければ、たぶん、「人と関わり続けること」なんてできっこないと思うからだ。札幌駅北口で僕はあのとき、途方に暮れながらも男性のどこかに共感できるものを確かに感じたのだと思う。

「共感の所在を探ること」。これが、今の僕が言える精一杯の答えだ。

最後になったが、今年度はいろいろな人たちに支えられて何とか半年、事務局長としてやってこれた。山内さんには頻繁に飲み連れてってもらって楽しい思いができたし、その他の面でも本当にお世話になった。下郷さんは今年度の途中から会に加わり、積極的に活動に関わってくれた。楠さんは、法律面の相談や会計処理、事務仕事など、縁の下の方力持ちとして大活躍してくれた。そのほかにも、本当にたくさんの人たちに助けられた。この場でお礼を言いたいと思う。

それから、去年10月に亡くなった勝又さん。勝又さんとは、労福会についてあれこれ議論したり、よく飲みにも行った。会の外でもとても仲良くしてくれた。勝又さんがいなかったら、僕は今頃、労福会にはいなかっただろう。

改めて、ご冥福をお祈りする。いずれまた話ができれば、嬉しい。

「労福会と私」

下郷 沙季（北海道大学文学部 3 年）

愛知の片田舎で暮らす高校 3 年生の秋、もうこの土地暑くて狭くてやってらんないから北海道にでも行こうと思って、志望校を北大にした。それで、ネットで北大のことを調べているうちに、オオタキという学生が札幌のホームレスについて書いているブログを見つけた。ホームレスのこと自体気になっていたり、なんとなくこの人おもしろいなと思ったので、ケータイのお気に入り登録して学校帰りにときどき開いては、なかなか更新されないな、この人いつも何してんだ、なんて考えていた。少しあとになって、それが「北海道の労働と福祉を考える会」というよくわかんない組織のブログだったと知り、北大に入ったらこの会で私も活動してみようか、とかなんとか思うようになった。

高校生活のほとんどを眠って過ごした私は当然ながら不合格だったので、一年間の浪人を経てやっと北大に入った。ばたばたと引っ越して、まだ部屋には段ボールが積まれたままの入学式前日、近所のコミュニティカフェで行われる小さな講演会にふらっと出かけた。店に入ってすぐ、きみ、一年生なの？一年生のうちからこんなときたら終わりだよ(笑)、と、ひょろっとして聡明そうな若者が話しかけてきた。オオタキだった。まさかの。

こうなるともう、こりゃすごい今すぐ労福入るしかない、となりそうなところだけど、私はすぐには活動に参加しなかった。いや、一度は参加しようとした。ビラに書かれていたアドレスに、参加したいという趣旨のメールを送ったのだ。しかし、そのアドレスは間違っていたのでメールが返ってきてしまい、それから学校が忙しくなったこともあって機を逃し、それでも自分はいつか労福で活動するのだろうとぼんやり思いながら、大学生活はだらだらと続いていた。

そして 3 年生の 9 月末、転機はやってきた。高田君から、路上で会った K さんの話を一緒に聞きに行こう、と誘われたのだ。高田君とは元々同じゼミだったので、彼が労福で活動していることは知っていた。が、別段そのことは意識しておらず、ただ、なんとなくこの人おもしろいなと思って、それで他の同期よりはちょっと親しかった。というわけで内心、うう、ついにきたか労福…！と思いながら、高田君についていった。で、案の定、それが入り口となって、労福という底なし沼にずるずる沈んでいった。

今回の事務局長の話も、あまりに人がいないもんだから入ったばかりの私なんかに白羽の矢が立ってしまい、傍目には「なんかちょっと手伝ってみたらまんまと巻き込まれた」的な状態ではあるんだけど、私自身はどこか少しほっとしている面もある。大学に入って労福とは無関係の活動ばかりやってたことに後悔はないのだが、ふとしたときに、労福やなくていいのか、って後ろめたく思う節もあったりしたので、ここにきてやっと本来の軌道に乗ったような感覚さえおぼえる。とはいえ、この軌道に乗ったまま滑らかな放物線を描いて「卒業」に着地するのは、私の器量ではどう考えても前途多難に思われ、やっぱり事務局長やりたくねーとも思う。それに雑務に追われるのも嫌だし、妙な肩書き

がつくのもまっぴらだし、無垢な女子大生ぶる自分も気持ち悪いし（そんなことしなくてもいいんだけど、若い女の子、しかもちょっと小さくて童顔、という立場を利用して野宿のおじさんたちに近づこうとする姿勢がオートモード）、だからとにかく面倒。夏休みの宿題を見て見ぬふりしたまま8月25日を迎えてようやく手をつけようとしているときの気分にそっくりである。数学の問題が100題あるのにまだ公式すら覚えてない。英語の例文100個暗記しなきゃいけないのに単語の意味がわからない。遅い。遅い。始めるの遅い。9月1日には一応間に合うかもしれないけど満足いくものではないね。絶対ぜったいできないね。でももうそれでもいいね。しょうがないね。

って感じで気分的には既に追い込まれてるのに、高田君が、総会の「来年度に向けて」のページ下郷さんが書いてよ、いいから早く書いてよこして、と急かしてくる。今年度のことも知らないのに来年度のことなんて書けるかよ！！できるわけねーよ！！！！下郷さんのやりたいこと書けばいいから、って言うけど、そんな突然現れて半年も経たない新人が古参の会員相手にでかい口叩けるわけないだろううううううう！！！！！！

そんな感じで来年度はスタートします。不手際だらけの一年になると思います。ごめんなさい。ごめんなさい。よろしくおねがいします。